

「ネットいじめ」と従来のいじめにおける加害者と被害者の心理

2080062 伊藤 健造
中等教育教員養成課程 情報専攻 齋藤研究室

1. はじめに

学校において「いじめ」への対応は重要な課題の1つである。近年では小中高生による携帯電話やインターネットの普及により、その方法も多様化してきている(内閣府, 2012)。

平成21年度に文部科学省が行った調査によれば、いじめの認知件数は約7万3千件と、前年度(約8万5千件)に比べ、減少している。またその中で「ネットいじめ」は3,170件(前年度より1,357件減少)であり、全体に占める割合は4.4%であった(文部科学省, 2012)。しかし、あくまでこれは認知件数であり実際にはもっと数多くのいじめが発生している可能性も考えられる。「ネットいじめ」については、教師や親などの目の届かない所で行われており、その実態や、従来のいじめとの違いなどについてさらに検討が必要である。そこで本研究では「ネットいじめ」と従来のいじめにおける被害者と加害者の心理に着目する。

2. 背景と目的

坂元(2009)のネットいじめの現状に関する調査からネットいじめの特徴として、(1)ネットいじめは匿名性が高い、(2)加害者に被害者の顔が見えない、(3)いつまでも攻撃が終わらない、(4)周囲に気づかれにくい、(5)影響力があることが指摘されている。

また、小針(2009)によりネットいじめの対策については、(1)情報モラルやネチケットの教育、(2)保護者から子どもへの積極的な働きかけ、(3)傍観者の協力によるいじめの抑制などが挙げられている。

さらに、安藤(2009)や樋口・深田・片山・蔵永(2008)はネットいじめと人間の心理社会的側面として学校への適応や家庭への適応、道徳観などについて調査し、(1)ネットいじめは加害者と被害者の両方を経験をしたことのある人が多い、(2)加害者も被害者も心理社会的要因のマイナス面を多く抱えている、(3)傍観者はいじめに加担するような行動はとらない。(4)傍観者は周りの環境に

よっていじめ関連行動が変化することが明らかになった。

このように、先行研究では「ネットいじめ」の特徴や対策について多く検討されているが、被害者と加害者のいじめに対する心的ダメージや罪悪感などの感情的な要因について従来のいじめと比較した検討は少ない。

そこで本研究では、従来のいじめとネットいじめとで、被害者が受ける心的ダメージや加害者が抱く罪悪感にどのような違いがあるのかを検討する。

本研究の目的は、以下の2点である。(1)従来のいじめとネットいじめにおける加害者が抱く罪悪感、被害者が受ける心的ダメージを比較する。(2)インターネット利用経験が、ネットいじめの加害者、被害者の感情にどのような影響を与えるかを検討する。

3. 方法

要因計画

調査は、いじめの種類(従来のいじめ、ネットいじめ)と、いじめの立場(加害者、被害者)を被験者間要因とした2×2の2要因被験者間計画で実施した。

調査対象

大学生107名を対象に、ネットいじめと従来のいじめの場面における加害者と被害者の心理に及ぼす影響について検討を行った。いじめの種類2種類と、いじめの立場の2種類を組み合わせた4種類のイラスト付きのいじめの場面のシナリオを作成し、シナリオをランダムに割り当て参加者に読んでもらいアンケートに答えてもらった。

質問紙

アンケートには役割取得、共感、そしてシナリオ内のいじめに関することなど書かれている。またネットいじめとインターネット利用経験との関係を明らかにするため、インターネット利用に関する調査も行った。アンケートの項目としては、性別はどちらか、インターネットを利用したことがあるか、インターネットの利用形態は何か、インターネットの利用頻度はどの程度か、インターネッ

トを使い始めた年齢はいくつか、インターネットの利用目的は何かを尋ねた。

4. 結果と考察

条件間の差

従来のいじめにおいてもネットいじめにおいても話の中の被害者に対する感情移入や共感が高い値を示していることが明らかになった。これは、従来のいじめよりもネットいじめの方が画面に打ち込まれる文章を自分が打っている姿が想像しやすく、主観的な視点によって考えることがよりできたのではないかと考える。さらに、相手に面と向かって話す場面よりも間接的に話す場面の方がいじめているといった感覚が少なくなり、より感情移入や共感ができたと考える。

また加害者が感じている相手の心的ダメージよりも被害者の心的ダメージの方が高い値を示していることも明らかになった。このような結果になるのは、加害者が被害者の気持ちを想像することが難しいという理由からであると推測される。

経験の差

図1は、加害者のあなたの罪悪感を示している。電子掲示板の利用経験のある加害者は「ネットいじめ」に関して、罪悪感をそれほど感じることがないことが明らかになった。しかし、従来のいじめに関しては罪悪感を大きく感じるようになった。電子掲示板の利用経験がない加害者は「従来のいじめ」に関して、罪悪感をそれほど感じることがないことが明らかになった。しかし「ネットいじめ」に関しては罪悪感を大きく感じるようになった。

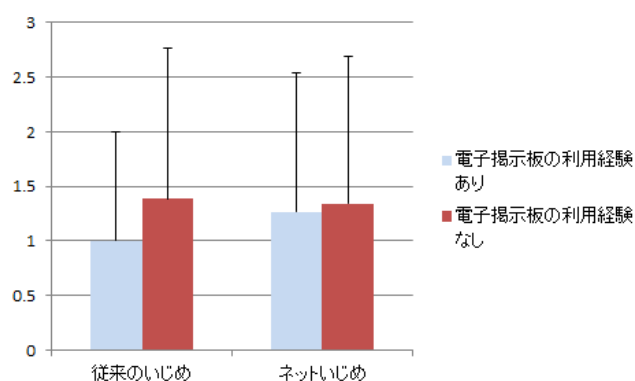


図1: 加害者のあなたの罪悪感

インターネットを多く利用している人、インターネットの電子掲示板を多く利用している人はネッ

トいじめに対する耐性が備わっているため、ネットいじめをする際には、あまり罪悪感を感じることがなく、いじめをしていることに気づきにくいので、誹謗中傷の言葉も増え過激になっていくと考えられる。逆に、ネットいじめを受けた際には、インターネット内での誹謗中傷、相手を傷つけるような発言を目にしている分、真に受けなかったり、回避の仕方を理解していたりするので、傷つきにくいと考えられる。しかし、インターネットを普通の人よりも多く使っている分従来のいじめに対する耐性は低くなっていると考えられる。そのため従来のいじめを行う際には罪悪感を多く感じている。

電子掲示板に書き込んだことのない人は書き込んだことのある人よりも心的ダメージを大きく受けていることが明らかになった。これは、電子掲示板で書き込んだことのある人はない人よりも掲示板での会話にも慣れていているということや対処の仕方についても知っているから小さくなったと考えられる。相手がどのような意図で書き込んだのか、書き込みによってどのような脅威があるのか、自分自身はどうすべきなのか、知識の有無がこのような結果になったと考えられる。

総合考察

ネットいじめと従来のいじめ加害者が抱く罪悪感、被害者が受ける心的ダメージはいじめそのものでは大きな違いこそ現れなかったが、インターネット利用経験の有無によりいじめのもたらす影響が大きく関わっていることが明らかになった。

参考文献

- 安藤美華代 (2009). 中学生における「ネット上のいじめ」に関連する心理社会的要因の検討. 『学校保健研究』, 51 (2), 77-89.
- 樋口匡貴・深田博己・片山香・蔵永瞳 (2008). いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響. 『広島大学心理学研究』.
- 小針誠 (2009). ネット上のトラブルにみるケンカの変質学校裏サイトにおける「ネットいじめ」の構造と対策 (特集 子どものケンカ) - (ネット上のケンカとトラブルあれこれ). 『児童心理』, 63 (13), 1246-1251.
- 文部科学省 (2012). 平成21年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/09/1297352.htm. (accessed 2012-1-29).
- 内閣府 (2012). 青少年のインターネット利用環境実態調査. <http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/index.html>. (accessed 2012-1-29).
- 坂元章 (2009). ネットいじめの現状、方法、問題性、対応. 『日本小児科学会雑誌』, 113 (12), 1917-1920.